

ピア・サポートによる子育て支援の有効性 —共通した保育観をもつ子育て仲間による「語り」からの検討—

Effectiveness of Child-Rearing Support Program Based
on the Peer-Support Approach -Analysis of the narratives of mothers with
common base for views of Early Childhood Education and Care-

向井 美穂¹⁾
MUKAI Miho

横井 紘子¹⁾
YOKOI Hiroko

渡邊 孝枝¹⁾
WATANABE Takae

金 允貞¹⁾
KIM YUN JOUNG

土屋 由¹⁾
TSUCHIYA Yuu

上垣内 伸子²⁾
KAMIGAICHI Nobuko

要 旨

本研究の目的は、子育て仲間でありながらも高い保育実践力と共通した保育観をもつ支援者によるピア・サポートとしての子育て支援の有効性について検討することである。十文字学園女子大学幼児教育学科卒業生であり現在家庭で子育て中の保育経験者が、自分の子どもと一緒に参加し、これまで培ってきた保育実践力を活かしながら地域の乳幼児とその親の子育ち・子育て支援事業を展開する「+（プラス）ママの子育てサロン」の取り組みを研究対象とする。保育の専門職と子育ての当事者という2つの要素をもつ支援者によるピア・サポートである。

2024年6月に、スタッフ6名を対象として、①大学での学びと保育実践とのつながり、②母親になったことでの変化、③+（プラス）ママのスタッフとしての思いについてインタビュー調査を行った。得られた語りの分析結果から、大学での学びで獲得した共通の保育観として【子ども・他者の内面理解】【表現する主体】【子ども主体の保育実践】という3点の特徴があり、その後、保育者としての実践を経て、自身の保育観・子ども観が実践と結びつき定着していったことがわかった。さらに母親になったことで、【保護者への理解・共感】【子どもへの受容の深まり】という視点が加わっていった。大

¹⁾ 十文字学園女子大学 教育人文学部 幼児教育学科

Department of Early Childhood Education and Care, Faculty of Education and Humanities, Jumonji University

²⁾ 十文字学園女子大学 人間生活科学研究科

Human Life Science Research Center, Jumonji University

学での学びを中核にした共通の保育観をもつ支援者によるピア・サポートの特徴として、【子ども中心】【共存】【対等な関係】【学び続けることでの自己変容】の4点が見いだされた。共通した学びを基盤とした保育観と高い保育実践力をもつスタッフの姿は、その場に参加している親にとって実質的かつ行動的援助として有効に機能し、遊びを存分に楽しむ子どもにとっては安心して遊べる場として認識されていることがわかった。スタッフも様々なピアの関係を構築しながら自身の学びを深め自身の保育観・子ども観と子育てを豊かにしていることが明らかになった。

I. 問題と背景

1. 子育てを取り巻く環境の変化と子育て支援の課題

子育てを取り巻く環境の急激な変化は、乳幼児をもつ親の育児不安や育児力の弱体化に影響を及ぼしている。日本の2023年の合計特殊出生率は1.20と過去最低水準となり、一方で虐待件数は毎年増加するなど、子育てにまつわる様々な問題を抱えている（厚生労働省, 2023）。さらに、コロナ禍により拍車がかけられ、子育ての孤立という社会問題を深刻化させ、子育てに対する否定的側面が取り上げられることが多くなっている（内閣府, 2021）。結果、子育てに価値を見いだすことが難しくなり、ますます少子化が進むという悪循環に陥っている。

2023年4月に「こどもまんなか社会」の実現を目的として発足したこども家庭庁は、こども基本法の着実な施行を掲げている。こども・子育て支援においては、「こどもを産み育てやすい環境」の整備、すべての子育て家庭を対象に、「地域のニーズに応じた様々な子育て支援の充実」に取り組んでいくとしている。

こうした国の方針のもと、現在までに様々な子育て支援が展開されてきた。母子保健領域における子育て支援、保育領域における子育て支援、心理臨床領域における子育て支援等、専門性や各領域によって、展開される子育て支援の捉え方や考え方もそれぞれである。従って、子育て支援が有効なものとなるには、支援者同士且つ多職種同士の協働的相互理解に基づいた連携が欠かせない。しかし現実には、支援方針の相違や拠り所とする理論的基盤の相違が原因で、支援の共通認識をもつことの困難さが生じる場合もある。子育ての方法や子どもの育ちに対する親の価値観が多様化している現実、支援者の子ども理解や親支援に対する認識の不一致といった要素が加わることで、子育て支援の有効性が損なわれる事態は避けなければならない。

現在、子育て支援の多くは、支援者であるスタッフがプログラムを提供したり、子育て相談に応じたりする形が中心となっている。そこでは、子育て中の親と支援者という関係の中で、親の子育てへの負担感を軽減させるよう支援を行っている。しかし、実際には子育て支援のスタッフの不足、場所の確保、時間の確保、予算の確保が難しいといった課題もある。支援活動をしているセンター、保育所の職員に支援の問題点を尋ねた調査研究からは、支援スタッフが問題として一番多く上げたのは「技術・知識が十分ではない」という回答であった（金谷, 2005）。また、「地域子育て支援拠点やスタッフによって支援内容に差が見られる」（周防, 2019）といった課題を指摘する研究もある。子育て支援スタッフがどのような保育技術や保育の知識をもっているか、何を中心に支援を行うのかといった支援者自身の価値観や保育観といった子育て支援の質的側面についても検討する必要があると考えられる。

2. ピア・サポートとしての子育て支援

越智（2016）は、ピア・サポートはソーシャル・サポートに包含される概念であるとし、ピア・サポートの定義として「同じ問題を抱えた人たちが自分たちをお互い助け合うこと（石原, 2013）」、「仲間による対人関係を利用した支援活動の総称（西山他, 2002）」であるとしている。また、ピア・サポートは「言葉による心理的援助のみならず、実質的、行動的援助が含まれる」（大石, 2007）ことから、親子を対象とした子育て支援の場においてもピア・サポートは有効な手段であると考えられる。

子育て中の母親同士のピア・サポートは、母親の孤独感からの解放や自己肯定感を高める効果（島田他, 2019）が得られるとされている。また、多胎児や障害児の親同士のピア・サポートといったある意味で特別な個人的体験を軸とした子育て仲間についての研究もある。多胎児の育児を行っている母親が多胎妊婦にピア・サポートを実施した研究（福島, 2009）では、多胎妊婦は、妊娠・出産の不安の解消や軽減、知識・情報の充足、育児への具体的イメージ化、仲間づくりの効果をj得ることができたとしている。一方で、ピア・サポーターである多胎児の育児を行っている母親は、自分とは異なった経験の状況が理解できず、対応に戸惑ってしまうことがあったという報告もある。このことから、ピア・サポートにおいて、ピア・サポーターは個人的体験といった共通項をもつだけではなく、専門的知識をもつ関わりも必要とされていることがわかる。

子育てにおいて、その時々sの悩みや不安はそれぞれであるが、それを誰かと共有することは、問題を解決することや不安を軽減することにつながる。問題の質や度合いによっても必要とされる支援は異なるが、そもそも問題を深刻化させないことも必要な視点である。しかし、それだけではなく親自身が子育てを楽しむ力をもつことも子どもの育ちに影響を及ぼす。親が子育てを楽しむ力を育むためには、高い保育実践力（子どもと遊び子育てを楽しむ力）をもつ子育て仲間と出会い、交流することが重要なことであろう。保育の専門性をもちながら子育てをしている仲間（ピア）と一緒に子どもの育ちを共有する体験は、親にとって子育てを楽しむ育児力の獲得につながる意義ある体験となると考えられる。そこで、子育て中の保育経験者によるピア・サポートは、単なる子育て支援の域にとどまらず潜在的な親の子育て力の活性化に寄与するサポートとしても機能しうる可能性があるといえる。

3. +（プラス）ママの子育て支援を対象とする意義

十文字学園女子大学幼児教育学科は、「子どもから学ぶ」ことを基本姿勢とした保育者養成を実践している。平成26年度より、幼児教育学科教員が所属する「幼児教育研究所」の主催で0歳から就園前までの地域の乳幼児とその親の子育ち・子育て支援事業「+（プラス）ママの子育てサロン」¹を開始した。支援スタッフ（+（プラス）ママ）は幼児教育学科の卒業生であり現在家庭で乳幼児を子育て中の保育経験者である。大学が卒業生のキャリアを活用しさらにそのエンパワメントを図りつつ、地域の子育てに貢献し、学生sのOJT（On the Job Training）の機能も有する子育て支援事業となっている。令和元年度からは「人間生活科学研究所」が主催して通年開催している。年間12～15回の開催、毎回の参加者は数組～20組、主たる活動場所は学内のプレイルームであるが、グラウンドや森、体育館などの学内施設も利用して活動している。コロナ禍前は10時～15時の開催、コロナ禍以降は9時30分～11時30分の開催となっている。支援の柱を子どもの自発的な遊びの援助におき、「子ども自身の遊ぶ力」と「親自身が子どもと共に楽しむ力」を育むことによって、親子の健全な子育てを支えることを目指している。ここでは、保育者としての専門性と経験を有する乳幼児を子育て中のスタッフが、自分の子どもと一緒に参加しながら参加者である親子の遊びと子育てをサポートするという形で支援が実践される。保

育の専門職と子育ての当事者という2つの要素をもつ支援者によるピア・サポートである。

「+(プラス) ママの子育てサロン」にて展開される保育経験をもつ子育て当事者による子育て支援の特性と有効性の検討を、2019年には支援活動の観察記録および終了後のカンファレンス記録の分析によって、2020年には参加者へのアンケートの分析によって行ってきた。

支援場面の観察からは、関わりを生み出す環境構成を状況に合わせて行う「環境を通しての子育て支援」という特性がとらえられた。「環境を通して行う保育・教育」とは保育の基本となる考えであるが、保育の場だけでなく、子育て支援の場においても、初めて出会う子どもや親同士をつないだり、一緒に遊んだりするように環境を再構成していくことは、保育者の専門性を発揮した子育て支援のあり方であり、これを可能にしているのは、保育者時代に培われた高い保育実践力であると考察された（上垣内他, 2019）。また、楽しく遊ぶ+(プラス) ママの子どもたちの姿が、まわりの子どもたちの遊びを膨らませていくという人的環境としての+(プラス) ママの子ども達存在の重要性も示唆された。

参加者へのアンケートでは、+(プラス) ママスタッフに対して、「安心できる」「親切」「成長を共に喜んでくれる」「気軽に会話できる」という回答が得られた。「+(プラス) ママの子育てサロン」では、自分の子どもが遊んでいることでスタッフも参加親子といっしょに遊びながらすごすことが多くなるため、物理的にも心理的にも距離が近く感じられ、気軽に会話が出来るとは思えないか、子育ての楽しさも大変さもまさに今経験しているスタッフ故に、通常の支援者とは少し異なる親しみやすさや親近感をもてるのではないかと考察された（上垣内他, 2020）。「+(プラス) ママの子育てサロン」での活動中、スタッフは時に苦勞しながら我が子に対応し、悩みながら子育てをしている姿も参加者である母親に見せることになる。このように、この保育に関する専門性と子育てに取り組む仲間性・当事者性を併せもち、実際にその姿を示しながら同じ場で過ごすということが、「+(プラス) ママの子育てサロン」のもつピア・サポートという支援特性であるといえる。また、スタッフは、毎回の参加者の人数や子どもの年齢や遊び様子、動き方を見ながら関わり、気になる親子への声かけなども自然な形で行っている。必要な援助に気が付き、スタッフ間で連携しながら対応する様子からは、子育て支援の根拠となる保育観・子ども観が共通していることが推測される。

こうしたこれまでの分析から考えられた共通の保育観と高い保育実践力、そして子育ての当事者性をもった「+(プラス) ママの子育てサロン」における支援がなされる背景にあるものは何か、現在の+(プラス) ママスタッフ全員に、学生時代からこれまでの子ども・保育・子育てに関する考えや体験について聞き取るグループインタビューを行い、明らかにすることを試みる。

Ⅱ. 目的

子育て仲間でありながら共通した保育観と高い保育実践力をもつ支援者がどのような思い・視点で地域の親子と関わっているのかをインタビュー調査により明らかにする。そこから、共通した保育観、保育現場での経験を活かした高い保育実践力、自身も子育て中であるという当事者性を併せもつ支援者によるピア・サポートの特性について分析し、その有効性について検討することを本研究の目的とする。

Ⅲ. 方法

対象者：2024年度の「+(プラス) ママの子育てサロン」のスタッフ 全員 6名

方法：半構造化面接形式のグループインタビューを2024年6月に実施した。1回のグループインタビューは3名、所要時間約2時間とする。対象者には事前に質問項目（表1）を提示した。質問項目は、研究目的に沿って大分類3問とし、質問1はスタッフ全員が経験している大学時代の共通した学びと保育実践とのつながりを明らかにする設問、質問2～3は保育の専門性と子育ての当事者性をもつピア・サポートの特性を明らかにするための設問となっている。インタビューはICレコーダーにて録音し、文字起こしを行った。

3名のインタビューが同席し、対象者が自身の考えや視点をより明確かつ詳細にまた自由に語ることができるようインタビューが必要に応じてファシリテーターの役割を担いながら環境を整えて実施した。なお、グループインタビューとした理由は、スタッフは「+（プラス）ママの子育てサロン」の設立時から話し合いを重ねており、互いの意見を伝えあう関係性が既に構築されており互いの意見を聴くことから得られる新たな考えや気づきが言語化しやすくなると考えた為である。

倫理的配慮：インタビューに際して、対象者全員に文書及び口頭での説明を行い、同意書を得ている。また、本研究は十文字学園女子大学研究倫理審査の承認（JEC 2023017-2）を受けている。

分析方法：質的研究法である定性的コーディング（佐藤，1992）に基づいて行った。具体的には、以下の手順である。インタビューの全発話分の逐語録を分析対象とし、本研究のメンバー6名それぞれが文字テキストデータを質問毎にカテゴリー化し、内容に応じたキーワードもしくはキーセンテンスを設定する（コードを割り振る）分析作業を行った。その後、各自が分析したカテゴリー及びキーワード・キーセンテンスについて全員で協議し、カテゴリー分類の妥当性を確認しキーワード・キーセンテンスを決定した。

表1．質問項目

	属性	①氏名
		②保育歴
		③子育て経験
質問1	大学時代の学びと保育実践について	①大学での学びの中で印象に残っていること、大切だと感じたこと
		②保育者としての実践と大学での学びのつながり
質問2	母になっての変化	
質問3	+（プラス）ママのスタッフとしての思い	①+（プラス）ママのスタッフとして大切にしていること
		②参加している親子に感じて欲しいこと
		③自分自身にとってどのような学びになっているか
		④自分の子どもにとってどのような経験となっているか
		⑤学生スタッフにとってどのような経験となっているか

IV. 結果と考察

インタビュー対象者の属性について表2に示す。また、語りから得られた全発話を対象として質問項目毎に検討し、分析方法に基づいてカテゴリー化したものを表3に示す。

表2. 対象者の属性

	保育歴	子育て経験
A	幼稚園(6年)、保育園(5年) <u>計11年</u>	男児1名、女児1名
B	幼稚園(4年、うち1年はフリー)、保育園補助(半年) <u>計約4年半</u>	女児2名
C	幼稚園 <u>8年</u>	女児1名、男児1名
D	幼稚園(6年半)、プラスママを開始後こども園(3年半) <u>計10年</u>	女児2名、男児1名
E	幼稚園(7年、うち2年預かり保育担当、副担任半年) <u>計7年半</u>	女児1名
F	幼稚園 <u>6年半</u>	女児2名、男児1名

1. 大学での学びと保育実践について

質問項目①の『大学での学びの中で印象に残っていること、大切だと感じたこと』に対する語りからは、【子ども・他者の内面理解】【実習からの学び】【表現する主体】【自己変容】という4つのキーワードが見いだされた。子ども（他者）が「何を考えているかを考えながら保育する」（1-1）など、保育の基本である子ども（他者）の内面理解の重要性とともに、自分にある既存概念や一般的な概念を捨てて子どもを見ること（1-2）の大切さも語られた。こうした子ども・他者の内面理解への姿勢は知識として獲得されたわけではなく、大学の実習で実際に「観察することで見えてくる子どもの内面」（1-4）に気付かされたという、実感を伴う学びによるものと捉えられた。さらに、自身が表現する主体として、どう考えてどう表現（アウトプット）するか（1-6）を授業を通して実践し、言葉だけではなく身体表現も含めアウトプットをすることの大切さや表現することの楽しさ、表現を通して得られる一体感や共通感覚（1-7,8）について、実感を伴って学んだと語られていた。この実感を伴う学びは、「保育しながら、こういうことなんだな」（1-11）と、保育者としてキャリアを積む中でさらに醸成されたことも語られており、自己変容をもたらす体験であった大学の学びが、実践によってより実感できるものになっていったと考えられた。

質問項目②の『保育者としての実践と大学での学びのつながり』に関する語りからは、【他者（子ども・親）理解の深化】【多角的に物事をとらえる】【共感的理解の重要性】【子ども主体の保育の実践】という4つのキーワードが見いだされた。保育者として子どもや保護者と関わる中で、質問項目①で語られた他者の内面理解がさらに深化したこと、多角的・多面的に捉えられるようになったこと、さらに、「子どもに共感できる自分になった」（1-18）と、保育者として子どもへの共感的理解が重要だとの認識が深まったことが語られた。【子ども主体の保育の実践】では、大学で学んだ子ども主体の保育が実践を通して確信されたことが語られた。具体的には、子どもの実態に合った環境を構成することの重要性（1-21）と、子どもの自発的な活動としての遊びの重要性（1-22）があげられた。遊びと環境構成は子ども主体の保育にとって不可欠な要素であり、大学での学びの中核をなすものであったと考えられる。

このように、大学時代の学びと保育実践については、子ども（他者）の内面理解、表現する主体となること、子ども主体の保育実践の3点がスタッフに共通する学びの要素としてあげられ、これらは保育者としての実践によって、自分の中で確信できるものとなり、自身の保育観・子ども観となっていることがうかがわれた。

表3. 各質問項目の「語り」の分類

1 大学での学びと保育実践について	
1-① 大学での学びの中で印象に残っていること、大切だと感じたこと	
キーワード	語
子ども・他者の内面理解	1-1: (福知山線脱線事故と乱暴な男児の事例から)子どもの内面を見ること、その子が何を考えているかを考えながら保育していくことが大切だと。一見いけないことをしたと捉えられてしまうが、 <u>その人なりの事情や理由がある</u> 、心の中にはこういうものがある。 <u>目に映ったものだけではないんだと</u> 。 1-2: 概念というのが残っている。子ども主体といえながら、どうしても自分の大人の経験した上でのものが出てしまう。大人の概念で見えてはいないか。
実習からの学び	1-3: 無心で観察すること。先入観じゃなくて、観察することの大切さと、その子の気持ちにどう寄り添うか、印象に残っている。 1-4: 経験として学べたと思うのは附属幼稚園の観察実習。観察は大事。観察することで見えてくる子どもの内面。保育現場でも、子どもの変化に気が付きやすい自分だったかと。 1-5: 実習でつながる。授業だけだと抜けてしまうが、それを頭に入れた状態で実習をやって、実体験とつながった。
表現する主体	1-6: 造形の授業、インプットとアウトプットの図。自分や友達がどう考えてそれをどう発表するかとか出すか、ということを経験した。それが子どもに関わる仕事に生き、保育者としての資質につながった。自分が経験したから子どもたちにもそういう経験をさせてあげたい。 1-7: (身体表現の)先生から殻を破りましょと言われて、すぐにはできなかったけれど、殻を破ることでどんどん楽しくなってくる。友達にも伝染して楽しめるようになって。 <u>それって身体表現に関わらず保育全体に使えるという</u> か。 1-8: いろいろな授業でアウトプットがあった。一緒に体を動かして、子どもと一緒にだという感覚を感じたり、そういう経験が保育でもすごく大事だと思った。
自己変容	1-9: 今の幼稚園は詰め込みみたいな印象があるけれど、そうじゃないというのを自分の大学時代の体験で身をもって感じられてたので、(保育者として)プレずにここまで来られた。 1-10: 自分が楽しまなくちゃ保育も、子どもたちも。自分がまず楽しめないと子ども達も楽しめないっていうのは経験として学べたかなと思う。 1-11: その時にはよくわからず、でも、分からなかったからこそ印象に残っていて、保育しながら、こういうことなんだなという思いが出てきた。 1-12: 概念、これは自分の思いを押しつけていないかな、というのは。今でも日常生活でも、すごく学びになっている。 1-13: 十文字で学んだことを(現場に)持って行って、さらに追加で現場で学んでいったところと、十文字の色を外に出てから知る。
1-② 保育者としての実践と大学での学びのつながり	
他者(子・親)理解の深化	1-14: 子どももいろんなこと考えたり見たり、吸収したりして動いているんだなっていうのは、やはり大学で学んで自分も実感したからこそ、子どもの気持ちにより添えるのではないかと。 1-15: 普段の生活の中でも、子どもや親子を見ているといろいろ考えてしまう。
多角的に物事を捉える	1-16: いろいろな角度から考えようという癖がついたのは、大学で内面を見る、多角的にみるということを教えてもらったから。 1-17: 内面を見ようという意識。保護者に対しても、きつとお母さんにも何かあるんだろうと、1歩踏み込んで考えられた。そういう視点を持つ癖をつけられたのは、大学での学びがあったからだと思う。
共感的理解の重要性	1-18: 子どもに共感できる自分になった学びがあった。 1-19: 公園でもスーパーでも、自分が何かできるかなと考えている。公園でも、疲れているのかなと、ママが気になったり。 1-20: 現場では子ども目線になっていて、保護者の人への支援はどこまでできていたんだろう。十分にはできていなかった。
子ども主体の保育の実践	1-21: 翌年の年少でも当たり前のように、4月から作ったが、子どもの姿からあれ？違うと。大学の授業を思い出し、年齢にあった環境、年少の4月にあった環境と考えて、夏休み撤去した。(環境を通した保育) 1-22: 就職した園は一日遊ぶ園で、遊びがどれだけ大事なんだかを4年間叩きこんでもらった。どういう遊びを展開していく、補助するべきか、何を用意するべきかを考えることができたのは、(遊びの重要性について大学で)学んだおかげかと。
2. 母になっての変化	
保護者への理解・共感	2-1: 母親になって子育てして同じ親の目線もわかって 2-2: 母親になってから、ママの気持ちもわかるようになり、考えるようになった。 2-3: 母親になって園に求めること、自分が母親になったから園に求めることが見えてきた。 2-4: 母親になってからは、「どうしてこのうち子は遅く来るんだろう」と思っていたのが、わかるようになった。家で子どもの自分の準備もして家のことをやってというのは大変。 2-5: お母さんも辛いときはある。そうした親の気持ちはわかる。先生だけしかやっていなかったらわからなかった。母になったことで、一番の理解はできる。同じって。 2-6: 母になったことで、一番の理解はできる。自分が経験しているから同じ。 2-7: 幼稚園で働いていた時は親御さんから(子どものことについて)言われた時には、「あ、言われちゃった」という気持ちがあったんですが、親になってからは、子どもってこんなに大事なんだと気づいた。
子どもへの受容の深まり	2-8: 子どもに対しては、何していても受け入れられる気がする。どんな姿もOK。 2-9: よくほめてくれると言われている。いい部分が見えるようになった。

3 +(プラス)ママのスタッフとしての思い	
3-① +(プラス)ママのスタッフとして大切にしていること	
保育者の専門性が生きた子ども理解と支援	<p>3-1:つい大人は後でねとか言っちゃうけど、その瞬間に子どもの興味が失せたり、やりたかったことが変わったりするから、なるべくフットワーク軽く、待っててねではなく今！で動く。</p> <p>3-2:子どもの目線というか、興味関心を見逃さない。</p> <p>3-3:見てたって、子どもはおもしろい。(目線で)子どもは興味を示しているんだよということを伝える。</p> <p>3-4:高いところに登ろうとして、ママが危ないって止めるけど、何かあったらキャッチしますよって(私が)手を添えると、今日は良いんだ、やっていいんだ、とママも言ってくれる。</p> <p>3-5:滑り台を逆さに登ることも、土踏まずが強くなるとか、運動能力として大事と学んだので、「すごいね、土踏まず強くなるね」とか、ダメと止めるのではなく、成長過程の中でつながっていくといったことを、ママにさりげなく伝えたい。</p>
同じ母親という対等性	<p>3-6:最初は、スタッフではなくて、何回か参加者で来ているので。</p> <p>3-7:スタッフも親子でいるところはどこを探してもない。アウトホームな感じ、親子でいますよっていうのを、来た方も、同じ目線で。</p> <p>3-8:仕事としてやっていることと親としてやっていることは違う。(保育者だったから)子育てに対して、自分で解決できるでしょうと言われてしまうが、そうではない。ここに親子できて、おなじ親子ですというところを強調して。</p> <p>3-9:遊びにきたんだから遊んでよって思っちゃうのが本心で。だけど、見てますねって声をかけてもらえると、ああそうかって。たぶん、私は娘に言ってもらったことがあると思うんです。</p> <p>3-10:うちの娘も離れなくて、場所見知りかひどかったんです。そんな娘も小学生でと話してみたり。</p>
参加者と支援者が共に育ち合う場	<p>3-11:公園とか子育て支援センターでは、いろんな人の目が気になっちゃうんだらうな、と思うので、子どもに伝える時も、「私はちゃんと自分の子どもに伝えていきます」とアピールするような気持ちになるママもいるんだらうな(と思う)、自分もだから。だから、プラスママに来たら、そういうこと(人の目を気にすること)はなしにしてというか。</p> <p>3-12:居心地のいい空間にできるかなって。まっすぐに我が子を見て、我が子と関わって遊んで見守って、というのができるような。そんな空間になればいいなと思う。どんな子どもの姿も肯定的な目で見られるような場にできればなあって。</p> <p>3-13:私も悩みながら育てているタイプで。そこ(支援センター)でしかいろんな子と遊んでいるところを見られないし、家では気になっていなかったところが気になったりする。(+(プラス)ママの子育てサロンでは)そういうマイナスな出来事が一つも起こらないで思っている。来てよかった、楽しかった、お母さんの心が軽くなること。</p> <p>3-14:取りあひっこになったときにうまくは入れないですけど、そういうときにうちの子(は困った子)って思いにないように、声をかけにいつている。</p> <p>3-15:支援センターは自分たちで行って好きに遊ぶ、そういう場所は必要だし、家庭とは違う環境でありがたい。でもそこにさらにスタッフやスタッフの子どもが加わって、一緒に遊んでいられる場所はなかなかないので。そういう優しさとか温かさを感じてもらえたら</p> <p>3-16:ここは新しいわが子が発見できる場所なんだと思っていただいたり、それをこちらが見つけたらそれをお伝えできるといいなと。</p>
3-② 参加している親子に感じて欲しいこと	
子どもが(満足して)遊ぶことの楽しさ	<p>3-17:子どもが遊びこめて満足していると、親も満足して帰れる</p> <p>3-18:ママも楽しかった、うちの子かわいいと、単純にいい気持ちで帰ってほしい。ママが楽しいと子どもも楽しいから。</p>
子どもが子どもと関わる	<p>3-19:子どもが子どもと遊ぶことを、ここは重視している。</p> <p>3-20:スタッフの子が(いて)ほしい。スタッフの子どもと取り合いをしてほしい。その経験をする上でスタッフの子が必要になる。</p> <p>3-21:できるだけ一緒に遊んだらうで、かむことはもちろん止めるが、取り合って泣くといった経験として必要なことを、当たり前のこととしてやってほしい。</p> <p>3-22:支援センターと同じように親子だけでの遊びをしている(とき)に、こうやって交流したらどうですかと提案して、親子と親子をつなげられるようにしている。</p>
子どもに対する肯定的な見方	<p>3-23:他の子と比べて、あれができないこれが足りないとか悩むのではなく、我が子に対して肯定的な見方をしてもいい。</p> <p>3-24:子どもの目線(になる)、子どもの見方(行動を肯定的に見る)ができるといい。実はこの子はいろいろと考えていると気づいていけるといい。</p> <p>3-25:家で見ているのと、こういうところで見ると、気持ちも違う。リラックスして子どもの姿を見て、いいところに共感してもらいたい。</p>
子どものありのままの姿の受容	<p>3-26:親子に、子どものありのままの姿でOKだと感じてほしい。いやがったり、泣いたり、ケンカもしたり、どれも成長過程で大事で、どの姿も大丈夫と思ってほしい。うちの子が片づけのときに泣いているのも悪い例として(捉えて)、先生の子どものこんな感じが、こんなでもいいのだと思ってほしい。</p>

3-③ 自分自身にとってどのような学びになっているか	
専門性の向上、向上意欲(新たな学びへの意欲)	<p>3-27:保育の目線が呼び起こされる。</p> <p>3-28:保育の感触を取り戻しているような感じ。</p> <p>3-29:(スタッフが)あちこちで対応しているのをつまんで自分に入れる。新たな学びの場。</p> <p>3-30:環境設定を学ばせてもらった。先生をやっていた頃、こんなに子どもの様子に合わせて変化をつけられたかなと思う。「環境を通しての保育」を、スタッフの動きから実感をもって学んでいる感覚がある。</p> <p>3-31:本を読むという意欲が出てきた。保育だけでなく、子どものことも学びたいという気持ちが生まれてきた。</p>
相互性、対等性を伴う関係を通しての学び	<p>3-32:与えるだけでなく、自分が得ているものがすごく大きい。</p> <p>3-33:参加者もすごく暖かくて優しく、一緒になってママ友という感覚で話してくれる。そういう繋がりが親子共に持てる場所。子どもの見方とか、参加者からも学ぶことが多い。皆に、自分とわが子を育ててもらっている感じがする。</p> <p>3-34:参加している親子の姿から自分も学ぶ。何パターンも対応を見られる。参加者だけでなく、スタッフの対応も見えて(学んでいる)。</p> <p>3-35:スタッフがすごい。言葉巧みだし。母親になってから学ぶ機会は減っているが、母親になってからもこうやって学べる機会がある。スタッフを尊敬。帰ってから(振り返って)気づける。いまだに勉強させてもらっている。</p> <p>3-36:一番若い私。スタッフの一手一投足、すべてが自分の学び。保育者を辞めてすっかり忘れてしまった感覚になっていたが、スタッフの動きを見て、ああそうだったなと、保育の感触を取り戻しているような感じ。</p> <p>3-37:先輩から学んでいる。</p> <p>3-38:先生から生の講義を聞く。忘れないようにしようと聞いている。</p>
子育ての振り返り、省察	<p>3-39:いろいろなママさんと一緒に皆で過ごし子どもにかかわると、自分の子育てを振り返ることができるので、自分の子育てに役立っている。</p> <p>3-40:私が満たされているので、自分の子育てでもよくなる。その日はやさしくできたり、こういうふうにするべきだったと振り返り次に生かせるから、ちょっと家の子育てでも良くなる。</p>
社会貢献、社会とのつながり	<p>3-41:仕事を辞めているので、ここが社会とのつながり、ある意味社会貢献にもなっているという意識を持たせてくれ、役立っているという感覚。社会の一員になれているという感覚をママたちの反応からもらっている。社会とつながっているありがたい場。</p> <p>3-42:社会とのつながりがここだけなのでありがたい。</p>
スタッフの子どもとの存在の大きさ	<p>3-43:スタッフの子どもがいるところ。スタッフがどんなに頑張っても引き出せない笑顔を、スタッフの子どもと遊ぶことで、お母さんも見たことのない顔を引き出される。大人ではなんともできないところ。ここで遊ぶスタッフの子どもを見て遊びに入る。子どもが子どもと遊ぶってすごいことだなと感じる。</p>
3-④ 自分子どもにとってどのような経験となっているか	
肯定的なまなざしの経験	<p>3-44:周りの人がそういうふうにあたたかく迎え入れてくれて</p> <p>3-45:いろんな暖かい目まなざしのもと、全部を肯定してくれるって言ったけれど、なんか自分にとってすごく楽しいところ。</p> <p>3-46:自由に子ども達が遊べる、こっちもそういう気持ちを持ってるからこそ自由に動ける。</p>
主体性の発揮	<p>3-47:周りの人がそういうふうにあたたかく迎え入れてくれててそういう人の中でのいろんな好きなおもちゃを自分で選択して遊べた。</p> <p>3-48:僕どうしようかなっていうことをなんかすごく考えて動いてるなっていうのもすぐ感じる。</p> <p>3-49:自然で遊ぶ、何もなくても遊べるっていうことを学べた</p> <p>3-50:ルールは守らせて。それを感じて動けるけれど、自由感はある。だからって教えるんじゃないで自然に。自然におもちゃはちゃんと元に戻す</p> <p>3-51:こんなに解放できる場所になったんだ。ここで今、解放されているんだ。親子共々、ここが溶けて、馴染んでいった。</p>
子ども同士の多様な関わり	<p>3-52:ここに来ると同じくらいの子とも確実に出会える。いろんな友達と関わる経験ができるなと思っている。</p> <p>3-53:いつも同じ場所に来てて、会ったことがある子と会える。</p> <p>3-54:理不尽な勝手に取っていく、というのをわが子にこの時期に経験できたのは良かった。</p>
3-⑤ 学生スタッフにとってどのような経験となっているか	
親子の関わりを学ぶ	<p>3-55:もちろんお子さんと遊ぶのも大事だけど、その時ママはどうしているのかな？ママの気持ちはどうなのかなとかはすごくみてほしいし感じてほしい。</p> <p>3-56:どういう関わりをこの親子でしているんだろうとかも見ることができる。</p> <p>3-57:子どもと一緒に遊べるだけでなくチャンスがあったら親御さんともお話ができたりするっていうのが、親を身近に感じられるのはいいな。</p>
スタッフ間の連携の理解	<p>3-58:ここのスタッフのお互いをわかっていて臨機応変に動いているチームワークの部分を読み取って感じてもらえると嬉しい。</p> <p>3-59:お母さんを楽しませる場所ではない、学生さんと1対1で遊ぶ場ではない。</p>
共に学び合う関係	<p>3-60:今私たちスタッフも学びながらやっているの、そういうのも学生さんに一緒に学んでもらえたら嬉しいなって思う。</p> <p>3-61:(意見を)出し合って、みんなでこう共有してああそれあったよね、あの時そうだったでしょうみたいな、みんなで話し合える場があるっていうのはいいのかな。</p>

2. 母になっての変化

『母になっての変化』についての語りからは、2つのキーワードが見いだされた。1点目は、【保護者への理解・共感】である。自身も母親となったことで保護者の思いがわかるようになった、保護者の大変さに共感できるようになった、という語りが共通してあった。さらには、母親になったことで子どもの大事さに気付かされたことも語られていた（2-7）。母親になったことで自身の在り方が変化し、過去の出来事の意味が捉え直され、保育者として働いていた時に会った保護者の思いに共感できるようになったことが読み取れた。2点目のカテゴリーは【子どもへの受容の深まり】である。子どもの内面理解を重視する姿勢は大学での学びによる共通した保育観の一つとして語られていたが、ここでは、母親になったことで子どもの姿をまるごと受け入れたり（2-8）、子どものよさを積極的に認めたりする（2-9）など、より子どもを受容する在り方になったことが語られていた。

これらの語りからは、スタッフが母親となったことで、スタッフと保護者とが子育ての大変さなどが共感し合える関係となっていることがわかる。つまり、語りのなかの「同じ」（2-1,5,6）という表現にあるように、スタッフと保護者は、親という共通項と対等性をもつピア関係となっており、スタッフ自身にもこの関係性への変化が捉えられている。さらには、母親となる前も、子どもの内面理解を重視するという共通の保育観をもっているスタッフたちであったが、母親であるという共通項が新たに加わり、子どもの大事さに改めて気付かされ、子どもを受容的に捉えるまなざしがより深まっていることを捉えることができた。

3. +（プラス）ママのスタッフとしての思い

質問項目①の『+（プラス）ママのスタッフとして大切にしていること』からは、【保育者の専門性が生きた子ども理解と支援】【同じ母親という対等性】【参加者と支援者が共に育ちあう場】の3つのキーワードが見いだされた。【保育者の専門性が生きた子ども理解と支援】では、子どもに対しては、子どもの目線から興味関心を捉える（3-2,3）、母親が制止しがちな場面でも子どもの気持ちを尊重して関わる（3-4）ことを重視し、母親に対しては、子どもの興味関心や成長につながる視点を伝えるといったさりげない支援（3-5）を大切にしていることが語られた。あるスタッフは、参加者として本サロンに参加した時、なかなか遊び始めないわが子に対し、スタッフが子どもの目線を捉えて「（興味をもって）見て（い）ますね」と声をかけたことで、わが子の姿を肯定して見ることができるようになったと語っている（3-9）。こうした+（プラス）ママの子ども理解と支援によって、母親は自分の子どもに対する新たな見方を知り、子どもの姿を肯定的に認められるようになると読み取れる。このような支援は、+（プラス）ママ自身も自分の子どもを連れて本サロンに参加している母親であるという【同じ母親という対等性】のカテゴリーにつながる。「同じ親子」（3-8）であり、同じ母親である+（プラス）ママが「同じ目線」（3-7）で参加者の親子に関わっている。そのうえで、+（プラス）ママは母親が自分のどのような子どもの姿も肯定でき、ポジティブな気持ちで満たされてほしいと願っている（3-12,13）。+（プラス）ママの子育てサロンは、遊ぶ場の提供といった地域の子育て支援センターとは異

なり(3-15)、支援者と参加者の双方が【参加者と支援者が共に育ち合う場】である子育て支援となっている。

質問項目②の『参加している親子に感じて欲しいこと』では、参加している子どもへの願いを捉えるキーワードとして【子どもが(満足して)遊ぶことの楽しさ】【子どもが子どもと関わる】の2点が見いだされた。+(プラス)ママの子育てサロンにくる子どもが「遊びこめて満足」(3-17)することができ、「ありのままの姿を出せる」(3-26)場であること、そして「子どもが子どもと遊ぶことを重視」(3-19)する場であることがスタッフの語りから明らかになった。子ども同士で「取り合いをしてほしい」(3-20)、「取り合って泣くという経験として必要なことを、当たり前のこととしてやってほしい」(3-21)と、子ども同士の関わりを大切にするスタッフの思いが語られている。そして、そうした「経験をすることでスタッフの子どもが必要になる」(3-20)と、+(プラス)ママの子育てサロンに継続的にくるスタッフの子どもが、子どものありのままの姿を引き出す存在として語られた。

さらに、参加者の親に対する思いを捉えるキーワードとして【子どもに対する肯定的な見方】【子どものありのままの姿の受容】の2点が見出された。子どもが子どものありのままの姿を出して遊びこんで満足し、子ども同士の関わりが生じていく土台として、参加者である親が「子どもの視線(になる)、子どもの見方(行動を肯定的に見る)ができる」(3-24)こと、「(子どもが)いろいろと考えていると気づくことなど、子どもに対する肯定的な見方の重要性が語られている。親が「子どものありのままの姿でOK」(3-26)となるよう、子どもに対する肯定的な見方を参加者の親と共有し、「親子と親子をつなげられるように」交流を提案してみる(3-22)といったスタッフの働きかけの姿勢が見える。くわえて、「(他の子と比べて)悩むのではなく、我が子に対して肯定的な見方をしてもいい」(3-23)、「ママも楽しかった、うちの子かわいいと単純にいい気持ちで帰ってほしい」(3-18)など、参加者の子どもへの肯定的な見方を促し、子どものありのままの姿を認めることで母親の気持ちが変わることへの願いを語りから読み取ることができる。

質問項目③『自分自身にとってどのような学びになっているか』に対しては、保育者としての自分の学びと、母親としての自分の学びという2つの観点からの語りがなされた。保育者としての学びからは【専門性の向上、向上意欲】と【社会貢献、社会とのつながり】、母親としての学びからは【相互性、対等性を伴う関係を通しての学び】がキーワードとして見いだされた。さらに保育者母親双方の立場に関わる学びのキーワードとして【子育ての振り返り、省察】と【スタッフの子ども存在の大きさ】が抽出された。

保育者としては、+(プラス)ママの子育てサロンでの支援の実践によって保育の専門性が高められているという実感(3-27,28,29,30)と、さらに高めていきたいという意欲(3-31)が語られた。社会とのつながりの場としてとらえている(3-41,42)ことも、保育者としてその専門性を発揮し実践しているという実感がもたらす語りであるにとらえられる。母親としての自分の学びについては、自分の子どもと共に過ごし、スタッフでありながら同時に母親としてもふるまっているという同時複合性をもつ学びの特徴に焦点が当てられ、相互性、対等性がキーワードとしてあげられた。「与えるだけでなく、自分が得ているものがすごく大きい」(3-32)という語りや、参加親子の姿や母親との語らいからも子育て中の母親として学ぶことが大きいという語り(3-33,34)からは、参加者とスタッフが「母親」という共通の基盤をもって対等な関係で過ごし学び合っているという、対等性が見て取れる。また、ほぼ全員が他のスタッフの言葉かけや環境の再構成によって遊びを発展させる間接的援助について学んでいると語っている(3-34,35,36,37)ことから、学ぶ者であると同時に学ばれる対象となっているとい

う、学び合う相互関係性も見えて取れる。

自分の子育てを振り返り省察するという語り (3-39, 40) からは、参加者の親子と相互的な関係の中で感じる満足感に支えられ、肯定的に自分の子育てを振り返ることができると語られている。スタッフの子どもと参加者の子どもとの関わりが新たな子どもの姿を引き出すということに対する気付きも、自分自身の学びとしてあげられていた (3-43)。

質問項目④『自分の子どもにとってどのような経験となっているか』に対しては、【肯定的なまなざし】【主体性を発揮】【子ども同士の多様な関わり】という3つのキーワードが見いだされた。スタッフの子どもたちは+ (プラス) ママによる「温かい迎え入れ」(3-44) や「温かいまなざし」(3-45) を通して、自分らしく遊びを楽しむことができる。何をして遊ぶかじっくり考えて自分のペースで動いたり (3-47)、室内だけではなく大学の広いグラウンドでの遊びを通して物にとらわれずに自然で遊ぶことを学んだりしている (3-49)。+ (プラス) ママの子育てサロンで子どもたちは主体的に遊びに取り組む中で、ルールにも気づき「自然におもちゃはちゃんと元に戻す」(3-50) 姿も見られるとスタッフは語っている。子どもたちが自由に遊べるのは「こっちもそういう気持ちをもって (い) るからこそ」(3-46) という語りから、子どもだけではなくスタッフ自身も自由に考え活動する場になっており、そのことが、スタッフの子どもたちの主体性を支えることに繋がっていると考えられる。

また、+ (プラス) ママの子育てサロンはスタッフの子どもたちにとって子ども同士の多様な関わりを経験する場となっている。同年代の子どもに出会ったり (3-52)、「会ったことがある子どもと会える」(3-53) のは、子どもたちにとって安心感をもたらす。同時に「理不尽な」経験ができるのも子どもたちにとって良かったと語られている (3-54)。多様な子ども同士の関わりを温かく見守るスタッフの存在があることがわかる。

質問項目⑤の『学生スタッフにとってどのような経験となっているか』に対しては、【親子の関わりを学ぶ】【スタッフ間の連携の理解】【共に学び合う関係】という3つのキーワードが見いだされた。子どもと遊ぶ時の母親の行動や気持ちを見たり感じたり (3-55)、子どもと遊ぶときには母親と話すことにもチャレンジしてほしい (3-57) という思いが語られ、本サロンが学生スタッフにとって学びの場でもあるとスタッフが意識しているとわかる。また、「(スタッフが) お互いがわかっていて臨機応変に動」くこと (3-58) など、スタッフ同士が、お互いの動きやその意図等を瞬時に捉えて行動するといったチームワークを学んでほしいとも期待している。学生スタッフと+ (プラス) ママスタッフは一方的な教える-学ぶ関係ではなく、「共に学び合う関係」にあると語る (3-60)。「スタッフも学びながらやっている」、「(意見を) 出し合って、みんなで共有して」、「みんなで話し合える」(3-61) という語りからわかるように、互いに学び合いながら成長していく仲間 (ピア) として学生スタッフを捉えるスタッフの意識が読み取れる。

V. 総合考察

本研究の目的は、子育て仲間でありながら共通した保育観と高い保育実践力をもつ支援者がどのような思い・視点で地域の親子と関わっているのかをインタビュー調査により明らかにし、共通した保育観、保育現場での経験を活かした高い保育実践力、自身も子育て中であるという当事者性を併せもつ支援者によるピア・サポートの特性とその有効性について検討することである。支援者であるスタッフが大学での学びから獲得した共通の保育観として【子ども・他者の内面理解】【表現する主体】【子ども主

体の保育実践】という3点の特徴があることがわかった。そこから、各自が保育者としての実践を経て、自身の保育観・子ども観が実践と結びつくことで定着していったことがわかった。さらに、母親となったことで、【保護者への理解・共感】【子どもへの受容の深まり】という視点が加わっていった。保育者としての実践経験はそれぞれ異なるものの、中核にある大学での学びの基本姿勢は揺るがず、それが+（プラス）ママのスタッフの質の高い子育て支援を可能にしている要素の一つであると考えられる。そうした共通の保育観をもつ支援者によるピア・サポートの特徴について以下の4点にまとめる。

1. 子どもが中心

子育て支援においては、一般的に親への支援が重視されるが、ここでは、第一に子どもを中心にとらえることの重要性が語られた。共通した保育観をもつ支援者によるピア・サポートには、子ども同士が関わり、子どもそれぞれがそれぞれのやり方で満足して遊ぶ姿を大切にしているところにその基本がある。参加者である母親は自身の子どもが遊ぶ姿を見て、スタッフの子ども理解を共有することでわが子への理解を深めていく。子どもを中心に環境を整えることが間接的に母親の支援につながっているということもわかった。

2. 共存（ありのままの自分を受容し受容される）

子どものありのままの姿を受け入れることの大切さが語られた。そこから、+（プラス）ママスタッフは、子どもはありのままの自分を受容されることで、自ら育つ力を発揮できることを信じて子どもと関わっていることがわかった。また、+（プラス）ママの子育てサロンでは、子どもだけでなく、その親、そしてスタッフ自身もありのままでいることを大事にしていることもわかった。これらから、+（プラス）ママの子育てサロンに参加する子どもとその親、スタッフ自身とスタッフの子ども全員が支援の場を構築する重要な一員であることがわかる。+（プラス）ママの子育てサロンは互いを受け入れながらその場にいることを大切にしていることにその特徴がある。

3. 対等な関係の重視

子育て支援の場ではあるが、スタッフの語りからは、誰かを支援するという語りは出てこない。子ども・母親・学生スタッフそれぞれに対してピアの視点を大切にしていることがわかる。その場にいる誰もがともに育ちあう場であると認識しており、それぞれの主体性を発揮することを重視した対等な関係を構築していることがわかった。

4. 学び続けることでの自己変容

スタッフの語りから、スタッフ同士の動きを通して自身が新たな視点を得ることがあり、それが自分の専門性を向上させ、意欲につながることがわかった。そこにはスタッフ間の連携やスタッフの意図を理解することでの気づきがある。大学時代の共通した学びを基盤とした仲間と保育実践を重ねることで、自分の（わが子も含めた）子ども理解や他者理解が深まり、そのことから自分自身の成長を感じられる場となっていることがわかった。

+（プラス）ママのスタッフは様々なピアの関係を構築しながら自身の学びを深め自身の保育観・子ども観を豊かにしていることが明らかになった。参加者である母親とのピア・子どもとのピア・スタッフ間でのピア・学生スタッフとのピアといった多様なピアの関係は、子どもの主体性を中核とした共通の保育観をもつスタッフの実践によって、より豊かなものとなる。そして、そこで展開される対等で相

手を尊重する仲間関係は、その場にいる親子にとって子育て・子育てを楽しむことにつながっていくと考えられた。親自身の子育ての価値観を広げ、子ども理解を深化させることにつながっていくと推察される。ピア・サポートは「言葉による心理的援助のみならず、実質的、行動的援助が含まれる」（大石、2007）とされている。共通した学びを基盤とした保育観と高い保育実践力とをもつ+（プラス）ママの姿は、その場に参加している親にとって実質的、行動的援助として有効に機能しているといえよう。また、そこに参加し遊びを存分に楽しむ子どもにとっても、安心して遊べる場として認識され、子ども自身のピアを育む基盤となっていくと考えられた。

VI. 本研究の課題と今後の展望

急速に進む少子化の流れは子育ての難しさを反映しているものとされ、子育て・子育てに関わる様々な施策や制度が実行されている。このような社会情勢においては子育て支援の物理的・量的支援の充実が図られることが優先され、質についての議論は後回しになっている。本研究の結果からは、支援者と支援される親子という関係性ではない子育て支援であるピア・サポートの特性が明らかになった。+（プラス）ママの子育てサロンは、地域にある大学の特質や資源を最大限に生かした子育て支援である。大学を中心として展開される質の高い子育て支援を継続させていくことは、昨今の日本の子育ての課題を解決するためにも、また子育てを楽しむことができる環境づくりに貢献するためにも重要である。一方、現在、大学を取り巻く社会状況の変化、スタッフの確保等、対応が必要な問題に直面している。今後いかにして継続的、定期的に開催できるかが課題としてあげられる。同時に、現在のスタッフが次の世代のスタッフと連携し、子どもを中心にとらえる共通の保育観をどのようにして継承していくかについても今後の課題である。この課題について引き続き検討を重ねることは、他の子育て支援を行っているスタッフにとっても参考になると考えられる。今後も、大学独自の取り組みである高い質の子育て支援の有効性について多角的に検討をしていくこととしたい。

本研究は十文字学園女子大学研究倫理審査の承認（JEC 2023017-2）を受けている。また、人間生活科学研究所の研究助成を受けている。

文 献

- ・石原孝二（2013）当事者研究とは何か―その理念と展開。石原孝二編『当事者研究の研究』医学書院。
- ・大石由起子,木戸久美子,林典子,稲永努（2007）ピアサポート・ピアカウンセリングにおける文献展望。山口県立大学社会福祉学部紀要,第13巻,107-121。
- ・越智祐子（2016）ソーシャルサポートとしてのピアサポートに関する一考察―育児マイノリティの実践から社会的包摂を展望する―。名古屋学院大学論集社会科学篇,第52巻第4号, 189-199。
- ・金谷京子,坪井敏純,吉田ゆり（2005）子育て支援の限界と今後の課題―保育所を中心とした子育て支援活動調査から―。保育学研究,第43巻1号,63-75。
- ・上垣内伸子,金勝裕子他（2019）乳幼児を子育て中の保育者が行うピアサポートとしての子育て支援事業「+（プラス）ママの子育てサロン」開催と有効性の検討。十文字学園女子大学COC事業「地域志向研究プロジェクト研究成果論文集2014～2018」,47-56。

- ・上垣内伸子, 渡邊孝枝他 (2020) 利用者のとらえる乳幼児を子育て中の保育者が行う子育て支援事業「+(プラス) ママの子育てサロン」の特性と有効性. 十文字学園女子大学人間生活科学研究所年報第1号, 7-15.
- ・厚生労働省 (2023) 令和5年 (2023) 人口動態統計月報年計 (概数) の概況.
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai23/index.html> (情報取得2024/9/29)
- ・佐藤郁哉 (1992) フィールドワーク 書を持って街へ出よう 増訂版. 221-228. 新曜社.
- ・島田葉子, 杉原喜代美他 (2019) 育児ストレスや育児不安, 育児困難を抱える母親への育児支援の実際とその効果についての文献レビュー. 足利大学看護学研究紀要7 (1), 69-81.
- ・周防美智子, 中典子 (2019) 地域子育て支援拠点事業における子育て支援効果と課題. 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 第26巻1号, 115-124.
- ・内閣府 (2021) 孤独・孤立の実態把握に関する全国調査.
https://www.cao.go.jp/kodoku_koritsu/torikumi/zenkokuchousa.html#: (情報取得2024/9/29)
- ・西山久子, 山本力 (2002) 実践的ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向. 岡山大学教育実践総合センター紀要, 第2巻, 81-93.
- ・福島裕子, 野口恭子他 (2009) 妊娠期からの多胎児妊婦ピアサポートの効果. 岩手県立大学看護学部紀要, 11, 43-58.

注

- ¹ 「+(プラス) ママ」とは、本子育てサロンのスタッフのことを指す。スタッフは全員、十文字学園女子大学幼児教育学科の卒業生+保育者として勤務経験がある+スタッフ自身も参加者と同様に乳幼児の育児中であることから「+(プラス) ママ」と名付けた。